

## 韓国におけるキリスト教主義大学の 形成・展開の考察に関する方法論的検討

\*松 本 麻 人

はじめに

1. 韓国キリスト教主義高等教育の研究をめぐる動向
    - (1) 先行研究
    - (2) 問題点
  2. 研究の問題意識と課題
    - (1) 問題意識
    - (2) 課題
  3. 研究の方法
    - (1) アジアの高等教育に対する理論的考察
    - (2) 研究の枠組み
    - (3) 文献・資料
- おわりに

### はじめに

韓国の高等教育には、私学セクターの規模が大きいという構造的な特徴があることが知られている<sup>1</sup>。しかし、その私立大学の少なからぬ数をキリスト教主義大学が占めていることは、ほとんど注目されていない。各大学を設置する学校法人の定款を通読すると、私立4年制大学の約4割は、キリスト教の理念に基づき高等教育を提供することを目的に設置・運営されていることがわかる。19世紀末に来訪した宣教師によって始められた学校に起源を持つこれらのキリスト教主義大学が、現代韓国の高等教育において重要な役割を果たしてきたことは想像に難くない。しかし、それらの大学が韓国高等教育の発展過程にどのように位置づけられるかについては、必ずしも十分に明らかにされていないのが現状である。

もちろん、近代高等教育の伝播という文脈で、旧韓末期及び日本統治期に展開された宣教師の高等教育事業の重要性については、複数の先行研究によって指摘されている。しかし、その多くは、日本による併合前後の時期を集中的に取り上げ、植民地教育政策の抑圧

が強まる中、宣教師の学校が高等教育の端緒を開いたことに焦点を当てている。一方で、高等教育事業のその後の展開、特に1920年代以降から現代に至るまでのキリスト教主義高等教育機関の展開について論究した研究は、意外なほどに少ない。推測される理由として、一つには、日本の植民地教育に対して現代韓国においては「韓国国民にとって非教育であり、反教育であると同時に、近代教育の挫折であった」<sup>2</sup>という見方が支配的であり、朝鮮総督府の教育政策に対する研究自体が否定されてきたことがある。キリスト教主義学校についても、日本の植民地政策に対する「抵抗」勢力として捉えること、すなわち民族独立運動に関わる一連の動きとして取り上げられることはあっても、教育の制度的な側面での意味を問うことは積極的に行われてはこなかった。そして、総督府の政策下において各種学校あるいはそれに準ずる機関としてキリスト教主義教育を維持してきた高等教育機関が、朝鮮に持ち込まれた旧制の専門学校制度に改編されると、これを「植民地教育体制への編入」<sup>3</sup>と見なし、キリスト教主義高等教育機関を植民地教育制度・政策と一体化して捉えるようになった。これはまた、多くの先行研究が、いわゆる「従属理論」の見方に基づいてなされているこ

\* 名古屋大学大学院教員

とを示唆している。

もう一つの理由として、植民地支配からの解放後に高等教育の規模が急速に拡大し、私学セクターにおいても世俗的な教育機関が急増した結果、キリスト教主義高等教育機関の「存在感」が相対的に薄まったことを指摘できる。私学セクターの拡大について、既存の研究では、農地改革を機に民間の土地の学校用地への転換が進んだことや<sup>4</sup>、国の経済成長とともに私立の専門大学が増加したことなどが指摘されている<sup>5</sup>。このように、解放後の社会の諸改革や産業の変化に焦点があてられ、「世俗的な」高等教育機関の拡大が積極的に評価される一方で、キリスト教主義高等教育機関の動態はほとんど注目されてこなかったのである。

こうした先行研究の動向を踏まえ、小論は、韓国高等教育の発展におけるキリスト教主義大学の意味を問うための前段階の作業として、考察方法の検討を行うものである。まず、関連する先行研究を渉猟し、これまで蓄積されてきた知見を整理するとともに、残されている問題点などを検討し、本研究の課題を明確にする。次に、その課題を論じるための理論的枠組みについて考察する。従属理論を基調とする従来の分析枠組みにとらわれない、キリスト教主義高等教育機関の主體的な動きを考察するための枠組みを検討する。

なお、小論が考察の対象とする地域は、時代区分によって呼称が異なる。小論では日本での慣例に従い、1897年から1910年まで続く大韓帝国時代を「旧韓国」、1910年から1945年までの日本統治期は「朝鮮」と呼称する。また、解放後の1948年に38度線以南に樹立された大韓民国については「韓国」とする。1945年の解放後、38度線以北は旧ソ連の軍政下に置かれ、1948年に朝鮮民主主義人民共和国が樹立されるが、1945年以降の38度線以北の高等教育については考察の対象としない。したがって、「旧韓国」あるいは「朝鮮」と称する際は、1945年8月以前の朝鮮半島全体の高等教育について述べているが、「韓国」と称している場合は、38度線以南の地域の高等教育についてのみを対象にしている。

## 1. 韓国キリスト教主義高等教育の研究をめぐる動向

### (1) 先行研究

#### ①日本語文献

韓国あるいは朝鮮におけるキリスト教主義大学を扱った研究は、日本国内においては多くない。そうした中で目を引くのは、日本統治期の朝鮮において展開された西洋の宣教師たちの教育事業を対象とした論考

で、阿部洋<sup>6</sup>や李省展<sup>7</sup>、馬越徹<sup>8</sup>による研究があげられる。

阿部の研究は、必ずしも高等教育に焦点を絞ったものではないが、朝鮮総督府の植民地教育政策に対するキリスト教主義学校の対応について探ったもので、日本国内での朝鮮キリスト教主義学校研究の嚆矢に位置付けられよう。阿部は、1910年の併合から三・一独立運動までの約10年間、いわゆる「武断政治」と呼ばれる時期における総督府とキリスト教主義学校の関係について論じ、宗教教育の禁止に対する学校の対応などについて明らかにした。また、併合以前に展開されたキリスト教主義学校の形成過程を整理しつつ、朝鮮の保護国化を進めていた日本側のキリスト教主義学校の認識を考察している。

李による研究も、高等教育が主題ではないが、宣教師たちによる学校の設置・運営などの教育事業について論考している。宣教師個人の手記や宣教師の報告書など、主に宣教師の内部資料に依拠しつつ、教育事業の展開や朝鮮総督府との葛藤を描いている点に特徴がある。小論との関係でいえば、プロテスタント諸派の超教派的な高等教育事業の試みを追っている点が興味深い。

馬越は、朝鮮王朝末期から現代に至るまでの高等教育の形成と展開について論じている。キリスト教主義大学については、主に併合前の時期と「武断政治」期における教育機関の形成とその教育内容について、植民地高等教育政策との関係性を踏まえつつ論究している。その論考において注目すべき知見の1つは、キリスト教主義高等教育機関をリベラルアーツ・カレッジと位置付けている点であろう。植民地教育政策の抑圧性を認めつつも、キリスト教主義高等教育機関の自律的な働きを相対的に位置付ける考察は示唆に富む。

#### ②韓国語文献

冒頭で述べたとおり、韓国では現代でも多くのキリスト教主義大学が運営されている。そのため、これらの教育機関に関する先行研究は多い。しかしその多くは、キリスト教主義教育の教育理念や教育内容の現代的意義を問うものである<sup>9</sup>。高等教育に限らなければ、キリスト教団体による教育活動、あるいはキリスト教主義学校の歴史的展開を論じた研究も少なくない。ただ、それらの多くの先行研究は19世紀末の開化期もしくは日本統治期といった朝鮮近代を対象としており、またその内容は植民地教育政策に対するキリスト教勢力（及び同勢力に協調する朝鮮人）の抵抗という視点で貫かれている。もちろん、植民地教育の抑圧性は否

定されるものではないが、宣教師による教育活動のすべてが「植民地政策への抵抗」と捉えられた結果、キリスト教的理念を基盤とする学校の主体性が見えづらくなっているきらいがある。

そうした歴史学的手法による先行研究の中で、キリスト教主義高等教育機関に焦点を当てた代表的な研究の1つに孫仁録による論考があげられる。孫は、教育史研究者として韓国近代教育史に関する多くの業績を残しており、キリスト教宣教団による教育活動についても幅広い考察を行った<sup>10</sup>。それらのうち、「キリスト教主義専門学校の大学昇格運動」に関する言及は小論との関係も深い。孫は、1920年代に焦点を当て、高等部を備えていた梨花学堂を基幹とする超教派の連合大学の設置計画の動向や、1910年代にすでに専門学校に昇格していた延禧専門学校を中心とする総合大学の設置計画の動向について取り上げるとともに、結局それらの計画が実現しなかったのは、抑圧的な植民地教育政策に帰結するものとしている<sup>11</sup>。

金英宇は、日本統治期の高等教育の展開を通史的に概観し、キリスト教主義高等教育機関についても、専門学校を中心に扱っている<sup>12</sup>。ただ、いずれの学校についてもその概要（教育目的・理念や沿革、教育内容など）について平板な記述を行うにとどまっており、韓国高等教育の発展史におけるキリスト教主義高等教育機関の意味を問うことまでは考察の対象としていない。

一方、韓龍震は、キリスト教主義高等教育機関の開設の経緯や設立者の背景などに注目しつつ、これらの機関の性格を探るとともに、その教育史的意義を探求している<sup>13</sup>。韓によると、教育機関が提供した学問分野や、設立に関わった宣教師の学歴や遍歴などを根拠に、韓国（朝鮮）のキリスト教主義高等教育機関はアメリカの影響を強く受けているという。さらに韓は、近代日本と朝鮮（日本統治期を含む）における私立学校政策及び高等教育政策の比較を行いつつ、両地に設けられたキリスト教主義学校を3類型に分類している。第一にリベラルアーツ・カレッジ型、第二にプロフェッショナル・スクール型、第三にユニバーシティ（総合大学）型の3つである。「大学令」に基づく大学の地位を獲得した日本のキリスト教主義学校に対し、抑圧的な植民地教育政策の下で朝鮮のキリスト教主義学校の地位は専門学校にとどまらざるを得なかったとしつつも、韓はこれらの機関の教育水準に一定の評価を与えている。ただ、そうした多様な類型で展開したキリスト教主義高等教育機関が、解放後の韓国における高等教育の発展にどのような影響を及ぼしたのかは

明らかにされていない。

### ③英語文献

次に、英語による先行研究に目を転じてみると、旧韓末、すなわち日本による併合直前期におけるキリスト教主義学校の教育に焦点を当てたものが多い。例えば、Klaus Dittrich は、宣教師の活動が私学の発展に大きく貢献したとし、特に一部の学校の「世俗的な」教育が果たした役割を評価している<sup>14</sup>。また、朝鮮における近代的な教育のモデル形成の影響として、宣教師の活動を通じたアメリカと、宗主国の日本をあげている。

他方、対象を特に高等教育に絞ったものはそれほど多くない。そうした中で、Sungho Lee は、日本統治期を含む朝鮮においてキリスト教主義学校が高等教育に及ぼした5つの影響として、1) 教育の民主主義、2) 教育の平等性、3) 女子教育、4) カリキュラムの発達、5) 高等教育組織の制度を挙げている<sup>15</sup>。また、Jeong-Kyu Lee は、旧韓末期から日本統治期にかけてのキリスト教宣教師による高等教育事業の影響として、▽キリスト教主義の移植、▽西洋的な実践教育や科学知識の重要性の認識、▽民主主義教育や女性教育の導入、▽西洋の学事運営システムやカリキュラム、教授方法の導入、▽独立と自助の精神の教授、▽朝鮮語での教育、▽キリスト教的人道主義やピューリタニズム、福音主義、民主主義、功利主義、実用主義といった西洋思想の紹介などを挙げた<sup>16</sup>。

そのほか、Peter Tze Ming Ng は、主に東アジアの3か国（日本、中国、朝鮮及び韓国）におけるキリスト教主義高等教育機関の展開について考察している<sup>17</sup>。それによると、他のアジア諸国との比較を通し、朝鮮におけるキリスト教主義高等教育機関は、帝国主義への抵抗とナショナリズムの促進の拠点となったという点がその特徴として挙げられる。すなわち、アジア諸国においては西欧の帝国主義の「道具」とみなされたキリスト教だが、朝鮮においては日本帝国主義に対する抵抗勢力とみなされ、朝鮮民衆の支持を得てそのナショナリズムの形成と維持に大きな役割を果たしたとしている。

これらの先行研究の内容や方法を整理すると、つぎのような傾向が見てとれる。まず、歴史研究の手法で行われたものが多い。教育史研究に位置づけられるこれらの研究は、キリスト教主義高等教育の草創期ともいえる時期に焦点を当て、高等教育の形成過程を明らかにしたものや、統治初期における朝鮮総督府との葛

藤を描いたものが多い。韓国における先行研究の多くはこれに分類されよう。英語文献でも、Sungho Leeなどが該当する。日本の研究では、阿部洋や李省展による研究が当てはまる。

次に、これもまた主に日本統治期に焦点を当てたものであるが、教育機関の教育内容や、他国・地域を含めた同時代における高等教育の背景などを勘案し、キリスト教主義高等教育の類型を探った研究がある。日本では馬越徹、韓国では韓龍震による研究がこれに当たる。これらは、現代韓国におけるキリスト教主義大学の展開を論じるにあたり、植民地統治期からの連続性の視座を提供する重要な研究に位置づけられよう。

## (2) 問題点

このように、多くの先行研究によってすでに一定の知見が蓄積されているが、課題も少なくない。第一に、近代韓国(朝鮮)におけるキリスト教主義高等教育機関に対する考察は、その対象とする期間が旧韓末期から日本統治期初期に至る約30年間の時期に集中している。この時期は、多くの先行研究が近代高等教育の形成期と位置付けていることからわかるように、韓国高等教育史において重要な時期であることは確かである。したがって、同時期を対象とする研究が多いことは何ら不思議ではない。しかし、それ以外の時期、すなわちキリスト教系専門学校が出揃った1920年代以降については、実証性を伴う詳細な検討が十分でない。さらに、1945年以降の韓国におけるキリスト教主義大学については、その教育理念や内容の現代的な意味を問う試みは多数蓄積されているものの、当地の高等教育の発展におけるキリスト教主義大学の意義を問う研究はほとんどなされていない。

第二に、キリスト教勢力の教育活動を民族運動の展開と一体化したものととして考察したものが少なくない。この傾向は、特に韓国内における研究に色濃く表れている。現代韓国においては、日本統治期におけるキリスト教に対する評価の1つとして、日本の植民地政策に対する抵抗勢力という見方が強調されている。キリスト教主義高等教育機関についても、例えば神社参拝をめぐる抵抗などに焦点を当てつつ、植民地政策との対峙が描かれてきた。

第三に、現代韓国高等教育の構造的な特徴との関連性に対する関心が低い。韓国の大学のうち、4年制大学に限ればその約3割、さらに私立大学に限定すれば約4割をキリスト教主義大学が占めている。こうした現代高等教育の私学セクターにおけるキリスト教主義大学の隆盛に対し、1945年以前のキリスト教主義高

等教育機関の形成・展開の過程はどのような意味を持つのか、適切な評価がなされてしかるべきと思われるが、管見の限り、現代の高等教育との有機的な連続性を意識した先行研究は見当たらない。

第四に、朝鮮のキリスト教主義専門学校の特徴が明らかにされていない。周知のとおり、日本統治期の朝鮮において展開された専門学校は、日本から持ち込まれた制度に基づくものであった。後述するように、日本国内において旧制私立専門学校の多様性に対する評価は高いが、朝鮮の私立専門学校については、その嚆矢となったキリスト教主義専門学校を含め、適切な評価がなされていない。朝鮮の私立専門学校の特徴を探るにあたっては、日本の旧制専門学校制度及び同制度に基づく教育との比較、検討が肝要と思われるが、制度的な比較はもとより、キリスト教主義学校を含む官立私立の専門学校群における教育の内実や社会との関係など、詳細な考察が不足している。

## 2. 研究の問題意識と課題

### (1) 問題意識

冒頭でも述べたとおり、韓国高等教育におけるキリスト教主義大学の量的プレゼンスは大きい。しかし、先行研究の傾向からも明らかとなり、併合前後におけるキリスト教主義高等教育機関の形成に関する関心は高いものの、その後のこれらの機関の展開及び同国における高等教育の発展との関係については十分な考察が行われていない。

また、朝鮮及び韓国におけるキリスト教主義高等教育機関について論じるにあたっては、次のような特徴に注意を払う必要があると考える。第一に、旧韓末期から日本統治期において、宣教団によって高等教育事業が開始された際、これらの機関が日本の植民地統治に対する「抵抗」の表象として朝鮮人に受け止められ、彼らの「ナショナリズム」の維持に一定の影響力があつたことである。第二に、多くの大学が1940年代から70年代にかけて設置された聖職者養成機関(神学校)に起源を持っていることである。キリスト教主義大学が神学校から発展すること自体はどの地域においても見られることであるが、韓国の場合、神学校の設置が特定の時期に集中するとともに、その多くが大学への昇格を果たしているという点に特徴がある。第三に、今日のキリスト教主義大学の多くが総合大学であることである。例えば日本のキリスト教主義大学には人文学中心の学問領域を構成している大学も少なくないが、韓国のキリスト教主義大学にはそうした大学はあまり見られない。もっとも、4年制大学の総合大学化は韓国



の大学全般の特徴であり、韓国高等教育の発展の一側面として捉える必要がある。

こうした特徴を勘案すると、韓国のキリスト教主義大学は日本のそれとは異なる発展形態を辿ってきたことが推察される。東アジアにおける高等教育の展開を比較教育的な見地から論じるにあたって、韓国のキリスト教主義大学について論究することは、同国高等教育の特異性を抽出する点で大きな意義があると思われる。

## （2）課題

先行研究の動向や韓国キリスト教主義高等教育機関の特徴を踏まえると、本研究の課題は次のように整理される。

第一に、日本統治期のキリスト教主義高等教育機関の教育理念や学問領域の構成、教育内容とその水準、卒業生の進路などを考察し、高等教育機関としての性格や社会的な位置づけを明らかにする。日本統治下においてこれらの機関は旧制の専門学校として展開されたが、官立を含む朝鮮の他の専門学校や日本本土（いわゆる内地）のキリスト教主義専門学校との比較も通して、日本統治下朝鮮のキリスト教主義専門学校の特質を探る。

第二に、キリスト教主義高等教育機関の拡大・発展の背景を探る。日本統治期における機関の形成及び継続、植民地解放後の拡大の諸要因について、教育機関及びそれを取り巻く政策や社会、キリスト教団体などの視点から多角的に考察する。韓国のキリスト教主義大学の多くが神学校を起源としていることを踏まえ、高等教育機関の前身に当たる機関も含めて考察の対象とする。

第三に、韓国の高等教育の展開におけるキリスト教主義大学の意義について考察する。量的規模において少なからぬ存在感を示すキリスト教主義大学が、高等教育の規模や内容の発展にどのような影響を及ぼしてきたかを論じる。キリスト教主義大学を構成する学問領域の変遷について分析し、国の政策、学術界や産業界との関係性を探る。それらの考察を通して、韓国高等教育の発展に果たしてきたキリスト教主義大学の機能や役割を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### （1）アジアの高等教育に対する理論的考察

以上のような問題意識と課題を念頭に、韓国におけるキリスト教主義大学の形成と展開の過程とその特殊性を明らかにするため、以下では考察の理論的枠組み

を検討する。

まず、既存の理論のうち、アジアの高等教育を分析する際に一般的によく言及される理論を確認しておく。アルトバックはその「支配－従属」モデルにおいて、アジアの大学が欧米大学をモデルにつくられ、国際的な「知」のネットワークにおいても従属関係がみられるとする<sup>18</sup>。また、ドーアは、アジア諸国での高等教育の拡大について、その要因を後発国における「学歴インフレーション」に求めている（いわゆる「後発効果」理論<sup>19</sup>）。有力とされるこれら2つの理論について、馬越は、それなりに説得力があるとしつつも、近年のアジアの状況には必ずしも当てはまらないことを付言している<sup>20</sup>。そして、馬越は、現代アジアにも有効と思われる理論的枠組みとして、カミングスのJモデルの伝播についてあげている。カミングスは、アジアにおける人的資源開発の構成要素として、①固有の価値の伝達と外国の技術の習得に重点を置きつつ行われる国家による教育と研究の調整、②初等教育の普及が最優先される一方、中等及び高等教育に対する政府の投資は工学や理学などの重要分野に限定、③政府の教育事業に対する学生やその家族、私学セクターによる重要な補完、④マンパワー計画と職業の配置、理学と工学の調整や、人材開発だけでなく、その活用も調整する政府<sup>21</sup>、の4点を挙げている。

「Jモデル」を一定程度評価する馬越は、中等・高等教育分野に対する国の重点領域は工学・理学分野であることと、受益者を含む民間セクターが国の教育事業の補完的機能を果たすことについて、特に高等教育に関連が深いことを指摘している<sup>22</sup>。ただし、このJモデルについても、韓国の場合、私学が工学・理学分野において重要な役割を担っていることを馬越自身が言及している<sup>23</sup>。すなわち、他のアジア諸国と比べて私学が特徴的な機能・役割を担っている韓国の事例の考察に当たっては、別の理論的枠組みを検討する必要があることを示唆している。

韓国高等教育における私学の特徴について、例えば大小の民間企業による支援を背景とする大学が多いといった指摘はあるものの<sup>24</sup>、新たな理論的枠組みの構築を意図した考察までは深められていない。また、1940年代から50年代にかけての農地改革時にみられた私有地の学校用地への転換は、私学拡大の有力な要因と捉えられているが<sup>25</sup>、その後の私学の量的規模にどのような影響があったが、実証的には分析されていない。いずれにせよ、私学が重要な役割を果たし、かつ他のアジア諸国と比べて特徴的な側面を有していると思われる韓国高等教育の私学は、その重要性に比して

十分な考察が重ねられていない。

このように韓国高等教育において重要な意味を持つ私学のうち、キリスト教主義大学の重要性は先に示したとおりであるが、私学そのものの評価が不十分である中、キリスト教主義大学についても適切な評価はなされていないのである。

## (2) 研究の枠組み

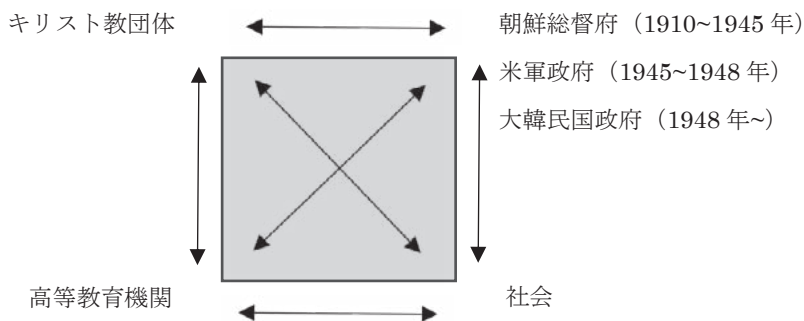
以上を踏まえ、韓国におけるキリスト教主義大学の形成と展開を考察するための枠組みについて吟味する。韓国の私学セクターにみられる多様性や柔軟性、キリスト教主義と民族運動の結合、政府（統治者）との関係の大幅な変化、教育事業に対する教派間の相違など、韓国のキリスト教主義大学を取り巻く諸相の把握と、それらの相互作用が高等教育に及ぼす影響を分析する必要性を念頭に置く。

高等教育機関の変容を考察する枠組みとして、例えば、パートン・クラークのトライアングル・モデルがある<sup>26</sup>。トライアングル・モデルは、高等教育の変化に影響を及ぼす要因として国家、社会(市場)、大学を挙げている。各要因間における力学的な変化が高等教育に影響を及ぼすという点は本研究にも大きな示唆を与えるが、これまで述べてきたような韓国高等教育の特徴を踏まえると、このモデルをそのまま朝鮮及び韓国のキリスト教主義高等教育に当てはめることはできない。というのも、キリスト教団体との相互作用を無視できないからである。ここでいうキリスト教団体とは、外国宣教団や教会及び教会の連合体などを含む。また、要因の一つである「社会(市場)」について、クラークのモデルでは市場や利用者(学生)が想定されているが、日本統治下においては、独立を希求する朝鮮民衆の運動(独立運動)との関係性も考慮する必要がある。さらに、1910年から1945年まで日本の植民地

統治下におかれ、また1945年から1948年までは米軍政府下におかれたことを踏まえると、「国家」要因も時代区分によって変化する。以上は図のように示される。

上述の枠組みを用いることで、次のような視点やアプローチによる考察が可能となる。まず、日本統治期と解放後韓国高等教育の「連続性」について、統治主体(日本、アメリカ、韓国)を相対的に位置づけながら、高等教育機関とキリスト教団体、社会の三者の関係性に焦点を当てながら考察する。これまで、日本統治期の高等教育と解放後の高等教育の有機的な連続性は積極的に論じられてこなかったが、高等教育に作用する各要因の変化に焦点を当てることで、植民地期から解放後を通したキリスト教主義高等教育機関の実際の展開を論じる。また、大学の前身に位置づけられる神学校の林立や、それらが大学に昇格していった背景、さらに総合大学へと発展していった経緯も明らかにできるであろう。一部の神学校などは日本統治期に設置されているが、これらについても高等教育研究の視点ではほとんど論じられておらず、詳細な考察が必要である。

本研究における分析枠組みのもう1つの柱として、戦前の日本におけるキリスト教主義専門学校の展開との比較を行う。天野郁夫は、戦前の旧制専門学校、特に私立専門学校在戦後の日本の高等教育の急速な量的拡大を促す構造的側面の形成を担ったとする<sup>27</sup>。こうした天野の視点は、日本の旧制専門学校制度が持ち込まれた韓国高等教育を考察する際にも有効だと思われる。本研究では、戦前の日本本土のキリスト教主義専門学校と朝鮮のキリスト教主義専門学校について、学問領域の構成や教育内容、高等教育制度における位置づけ、社会的な機能などを比較する。それにより、朝鮮のキリスト教主義専門学校の特徴を明らかにするとともに、解放後の高等教育の発展との関係性を考察



図：朝鮮及び韓国におけるキリスト教主義高等教育機関の展開を考察する枠組み

する。

### （3）文献・資料

本研究は、基本的に文献調査によって行う。使用する主な文献・資料は、次のように整理できる。

まず、キリスト教主義大学に関する資料として、初期の高等教育機関の設置に関わった宣教師の資料がある。朝鮮における宣教を主導したアメリカの長老派（Presbyterian Church in the U.S.）とメソジスト派（Methodist Episcopal）の年次総会資料や、各宣教師が発行した報告書などには高等教育事業に関する記述が多くみられ、重要な一次資料である。また、各機関の設置・運営は、それに主体的に関わった宣教師個人の働きによる影響も大きかったが、そうした宣教師らの手記や書籍なども貴重な資料となる。代表的なものとしては、現在の延世大学の前身となる学校の創設者であるアンダーウッドの『朝鮮の近代教育』<sup>28</sup>や、長老派宣教師の教育事業に影響を持っていたブラウンに関連する資料が収められた A. J. Brown Materials などがある。

各教育機関による資料としては、有力な大学は充実した学校史を編纂しており、これらを活用する。例えば、『延世大学百年史』<sup>29</sup>や『梨花100年史』<sup>30</sup>、『崇實100年史』<sup>31</sup>などがある。そのほかの大学についても、学校史のほか、各大学がウェブサイト等で公表している学校略史などを通して、大学の展開過程や学部学科の構成の変遷などを探る。また、上述のとおり、日本のキリスト教主義大学との比較も主に旧制専門学校としての展開過程を中心に行うが、そのために例えば、同志社大学や明治学院大学などの学校史も資料として活用する。

政府関連の資料としては、朝鮮総督府や米軍政、大韓民国政府の各種資料が挙げられる。これらには統計資料のほか、報告書や政策文書などが含まれる。朝鮮総督府の関連資料では、『日本植民地教育政策史料集成：朝鮮篇』<sup>32</sup>に収められている各種の統計や文書がある。米軍政関連の資料としては、『韓国内政関係記録文書』（Records of the U. S. Department of State Relating to International Affairs of Korea, 1945-1948）や Joseph C. Trainor Collection などに解放後朝鮮の教育に関する資料が含まれている。

新聞や雑誌などでは、現代でも有力な日刊紙の1つである「東亜日報」が、日本統治期も含めて教育に関する動向を子細に伝えている。そのほか、『ソウル六百年史』などの郷土史に分類されるような資料にも教育について伝える情報が豊富に含まれており、参考になる。

### おわりに

韓国のキリスト教主義大学に関する先行研究においては、その射程とする時期に偏りがあること、また考察の視点が日本の帝国主義との対立に焦点があてられる傾向が明らかとなった。高等教育研究の観点からは、高等教育機関としての類型を論じたものもあるが、解放後の発展との連続性にまで踏み込んで実証的に検証した研究は見られない。

一方、キリスト教主義大学の韓国における特徴として、日本統治期において朝鮮民衆の「ナショナリズム」の維持に影響を持っていたこと、聖職者養成機関の大学昇格が多いこと、総合大学であること、などがあげられる。韓国高等教育の展開を論じるにあたって、4年制私立大学の約4割を占めるキリスト教主義大学の意義を考察することは重要である。

これらを踏まえつつ、韓国におけるキリスト教主義大学の発展過程を明らかにするため、小論ではクラークのトライアングル・モデルを参考に、キリスト教主義大学を取り巻く諸要因として4要因を設定する枠組みを検討した。また、朝鮮及び韓国のキリスト教主義高等教育機関の特徴を明らかにするため、戦前の日本のキリスト教主義大学（旧制専門学校）と比較する視座を設定した。

今後は、小論で検討した枠組みに基づき、朝鮮及び韓国のキリスト教主義大学の展開の諸相に迫り、高等教育の発展過程におけるその意義について論じていくことを研究課題とする。

### 〔注〕

- 馬越徹『比較教育学—越境のレッスン—』東信堂、2007年、192～193頁。
- チョン・ジュ Chol 「韓国での日帝植民地時代の教育史研究の動向」『韓国教育史学』第22巻第2号、2000年、222頁（정재철 「한국에서의 일제식민지시대 교육사 연구 동향」『한국교육사학』제22권제2호、2000년、222쪽）。
- チョン・ジュニョン 「1910年代朝鮮総督府の植民地教育政策とミッションスクール：中・高等教育の場合」『社会と歴史』第72集、2006年、238頁（정준영 「1910년대 조선총독부의 식민지교육정책과 미션스쿨」『사회와 역사』제72집、2006년、238쪽）。
- オ・ソンベ 「私立大学の膨張過程の探索：解放後の農地改革期を中心に」『韓国教育』第31巻第3号、2004年、53～73頁。（오성배 「사립대학 팽창 과정 탐색：해방 후 농지개혁기를 중심으로」『한국교육』제31권

- 제 3 호, 2004년, 53-73쪽)。
- <sup>5</sup> 馬越徹「アジアの経験—高等教育拡大と私立セクター」『高等教育研究』第2集, 1999年, 117頁。
- <sup>6</sup> 阿部洋「併合初期における朝鮮総督府とキリスト教主義学校—植民地教育政策の一側面」『教育学研究』第27巻第2号, 1960年, 111-122頁。阿部洋「併合直前の朝鮮におけるキリスト教主義学校」『日本の教育史学』第16巻, 1973年, 46-64頁。
- <sup>7</sup> 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代: ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』社会評論社, 2006年。
- <sup>8</sup> 馬越徹『韓国近代大学の成立と展開: 大学モデルの伝播研究』名古屋大学出版会, 1995年。
- <sup>9</sup> 例えば, イ・ウンソン「教養科目を通したキリスト教大学人格教育の戦略的運営方案の探索」『キリスト教教育論叢』第51巻, 2017年, 101-124頁 (이은성「교양과목을 통한 기독교대학 인성교육의 전략적 운영 방안 탐색」『기독교교육논총』제51권, 2017년, 101-124쪽) など。
- <sup>10</sup> 孫仁録『韓国近代教育史』延世大学校出版部, 1971年, 孫仁録『韓国開化教育研究』一志社, 1980年, 孫仁録『韓国教育史』文音社, 1987年。
- <sup>11</sup> 孫仁録『韓国近代教育史』延世大学校出版部, 1971年, 195-199頁。
- <sup>12</sup> 金英宇「開花期の高等教育制度—韓国近代高等教育制度変遷史(1)」『大學教育』第44巻, 64-76頁, 金英宇「日帝早期の高等教育制度—韓国近代高等教育制度変遷史(2)」『大學教育』第45巻, 52-62頁, 金英宇「日帝中期の高等教育制度(上)—韓国近代高等教育制度変遷史(3)」『大學教育』第46巻, 54-64頁, 金英宇「日帝末期の高等教育制度(下)—韓国近代高等教育制度変遷史(完)」『大學教育』第48巻, 56-57頁。
- <sup>13</sup> 韓龍震「キリスト教系学校による近代韓国高等教育の考察」『教育問題研究』第6巻, 1994年, 177-194頁 (한용진「기독교계 학교에 의한 근대 한국 고등교육 고찰」『教育問題研究』第6輯, 1994년, 177-194쪽)。韓龍震「近代韓日キリスト教系大学の形成過程の比較考察」『教育研究』第32巻第1号, 1994年, 135-150頁 (한용진「근대 한일 기독교계 대학의 형성과정 비교 고찰」『教育研究』제32권제1호, 1994년, 135-150쪽)。
- <sup>14</sup> Klaus Dittrich. The beginnings of modern education in Korea, 1883-1910, *Pedagogica Historica*, 50(3), 2014, pp.265-284.
- <sup>15</sup> Sungho LEE. The emergence of the modern university in Korea. *Higher Education*, 18(1), pp.87-116.
- <sup>16</sup> Jeong-Kyu Lee. Christianity and Korean Higher Education in the Late Chosen Period. *Christian Higher Education*, 1(1), 2002, pp.85-99.
- <sup>17</sup> Peter Tze Ming Ng, Globalization, Nationalism, and Christian Higher Education in Northeast Asia, *Christian Higher Education*, No.8, pp.54-67.
- <sup>18</sup> P.G. アルトバック, 馬越徹編(北村友人監訳)『アジアの高等教育改革』玉川大学出版部, 2006年, 12-9頁。
- <sup>19</sup> R.P. ドーア(松居弘道訳)『学歴社会: 新しい文明病』岩波書店, 2008年, 103-118頁。
- <sup>20</sup> 馬越徹『比較教育学—越境のレッスン—』東信堂, 2007年, 183頁。
- <sup>21</sup> Cummings, W. K. & Altbach, P. G., *The Challenge of Eastern Asian Education*, State University of New York Press, 1997, pp.275-276.
- <sup>22</sup> 馬越徹, 同前書, 184頁。
- <sup>23</sup> 馬越徹, 同前書, 196頁。
- <sup>24</sup> 馬越徹, 同前書, 193頁。
- <sup>25</sup> オ・ソンベ, 前掲書。
- <sup>26</sup> バートン・R・クラーク著, 有本章訳『高等教育システム: 大学組織の比較社会学』, 東信堂, 1994年。
- <sup>27</sup> 天野郁夫『高等教育の日本の構造』玉川大学出版部, 1986年, 13-14頁。
- <sup>28</sup> Horace Horton Underwood, *Modern Education in Korea*, International Press, 1926.
- <sup>29</sup> 延世大学校百年史編纂委員会編『延世大学校百年史: 1885-1985』延世大学校, 1985年(연세대학교 백년사편찬위원회 편『연세대학교 백년사: 1885-1985』연세대학교, 1985년)。
- <sup>30</sup> 梨花100年史編纂委員会編『梨花100年史』梨花女子大学校出版部, 1994年(이화여자100년사 편찬위원회 편『이화100년사』이화여자대학교 출판부, 1994년)。
- <sup>31</sup> 崇實百年史偏差委員会編『崇實100年史1: 平壤崇實』崇實大学校, 1997年(승실백년사편찬위원회 편『崇實100年史1: 평양승실』승실대학교)。
- <sup>32</sup> 渡辺学, 阿部洋編『日本植民地教育政策史料集成: 朝鮮篇』龍溪書舎, 1989-1990年。



## A Methodological Study on the Formation and Development of Christian Universities in Korea

Asato MATSUMOTO\*

Although Christian universities account for forty percent of four-year private universities in Korea, there is insufficient mention of the role they have played in the development of Korean higher education. This research examines how information accumulated from previous studies reveals a theoretical framework from which to discuss the autonomous functions of these Christian universities.

Previous studies in Japan have mainly focused on the period before and after the Annexation of Korea in 1910, in particular the process of creating higher educational institutions of Christianity, the curricula, and the gathering of ecumenical works by missionaries. In South Korea where there are many studies on Christian universities that highlight the contemporary significance of Christian higher education. Regarding studies that emphasize the historical development of these Christian higher educational institutions, most regard school formulation as the result of ethnic resistance to colonization policies. Research in English has clarified characteristics of Korean Christian higher educational institutions via comparisons with other Asian countries' colonial experiences. Still, these research perspectives fail to describe a clear path of development for Korean higher education.

Furthering previous studies, this research has three objectives: 1) to clarify the character and social position of Christian higher educational institutions, 2) to explore the background of the development and expansion of Christian higher educational institutions, and 3) to clarify the significance that Christian higher educational institutions had in the development of Korean higher education. As a research framework, this paper looks at four factors - nation, society, university and Christianity- and how each contributed to the development of higher educational institutes in Korea. Furthermore, we clarify the characteristics of Korean Christian higher educational institutes via a comparison with Japanese Christian universities, especially professional schools in the pre-war system, and discuss the continuity of development of Christian higher educational institutes from the Japanese colonial period.

Utilizing this research framework, we plan further studies that hope to advance the study to discuss the significance of Christian universities in Korean higher education.

---

\* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University